

<主要株価指数>

	終値	前日比
日経平均株価	14827.83	131.80
N Y ダウ	16,323.06	58.83
D A X (独)	9,587.19	135.98
FTSE100 (英)	6,615.58	27.26
CAC40 (仏)	4,411.26	32.20

<外国為替>※

ドル円	102.85 円	0.02 円
ユーロドル	1.3751 ドル	0.00 ドル

<長期金利>※

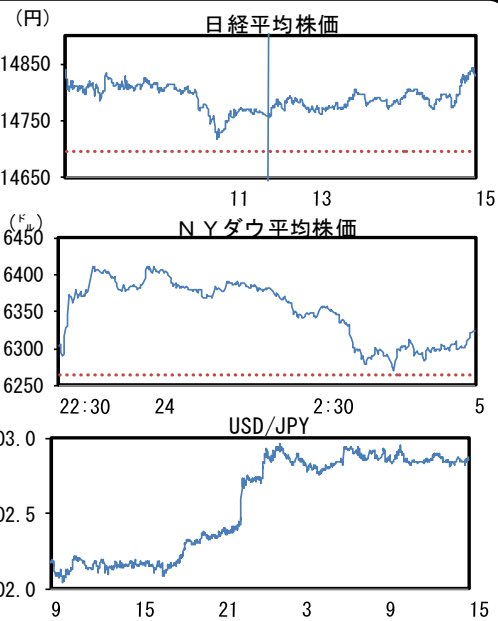
日本	0.645 %	0.02 %
米国	2.721 %	0.04 %
英国	2.724 %	0.05 %
ドイツ	1.548 %	0.01 %
フランス	2.064 %	0.01 %
イタリア	3.303 %	-0.00 %
スペイン	3.238 %	-0.01 %

<商品>

N Y 原油	101.67 ドル	0.39 ドル
N Y 金	1293.80 ドル	-0.90 ドル

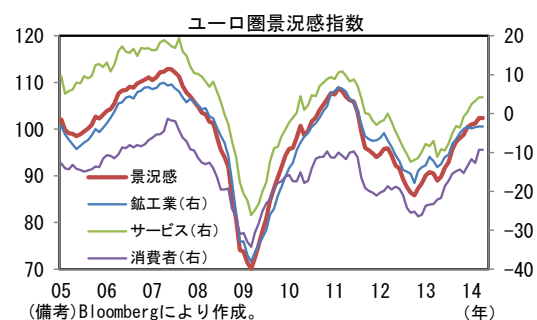
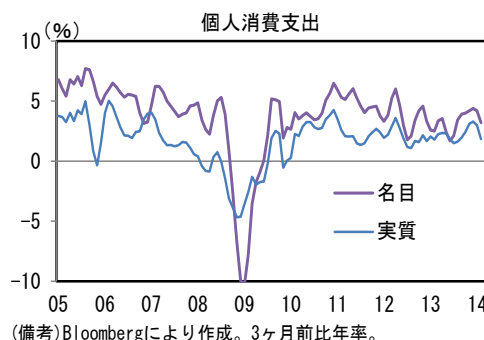
※は右上記載時刻における直近値。図中の点線は前日終値。

(出所) Bloomberg



【海外株式市場・経済指標他】 ～ユーロ圏景況感是一段と改善～

- ・ N Y ダウ平均株価は前日比+58.83ドルの16323.06ドルで取引終了。
- ・ 2月名目個人消費支出は前月比+0.3%と予想に一致も、前月分は下方修正(▲0.2%→▲0.4%)。3ヶ月前比年率では+2.1%と前月(+3.5%)から減速した。実質ベースでも3ヶ月前比年率は+1.8%と前月(+3.0%)からペースダウン。名目個人所得が前月比+0.3%と伸び、貯蓄率は4.3%と0.1pt上昇したものの、肝心の賃金・給与は+0.2%と伸び悩んだ。PCEデフレーターは前月比+0.1%増も前年比では+0.9%と昨年10月以来の水準に落ち込み、コアPCEデフレーターは前月比+0.1%、前年比+1.1%と目標を大幅に下回って推移している。
- ・ 3月ユーロ圏景況指数は102.4と市場予想(101.4)を上回り、前月(101.2)から改善。消費者信頼感指数は▲9.3と速報値から不変(前月:▲12.7)で押し上げ寄与。その他、鉱工業(▲3.5→▲3.3)、サービス(+3.3→+4.2)も改善を継続しており、広範なセクターで景況感が上向いている。ユーロ圏PMI(総合)は小幅軟化(53.3→53.2)となったが、緩やかながらも成長ペースは加速している模様。
- ・ ミシガン大学消費者信頼感指数は80.0と速報値から0.1pt上方修正も、予想(80.5)は下回った。



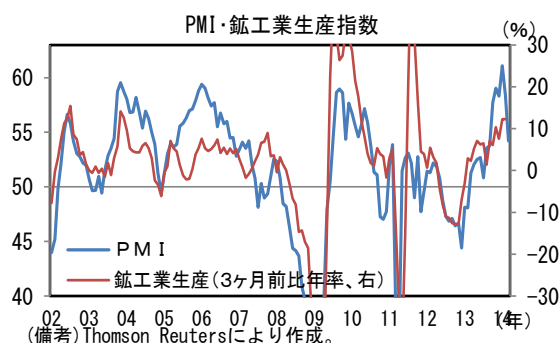
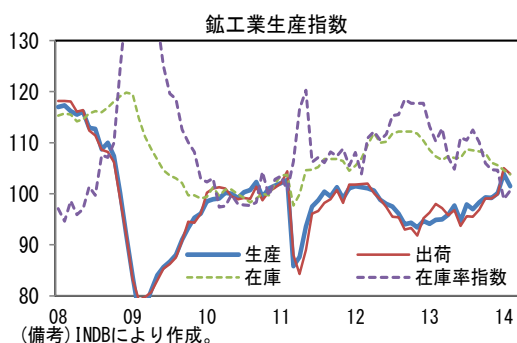
本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

【外国為替相場・債券市場】～止まらない5年金利～

- ・28日のG10通貨はJPYの弱さが目立った。欧米株ラリーのなか、米2－5年ゾーン金利上昇を手掛かりにUSD/JPYは102後半まで上伸。EUR/USDはドイツの各州CPIが軒並み予想を下振れたことから一時1.37前半まで下げる場面があった。その他経済指標では2月仏個人消費支出が▲0.3%と予想（+0.3%）を大幅に下振れ、1月のVAT税引き上げが重く押し掛かっていることを窺わせた。31日の日本時間でUSD/JPYは、日IIPのネガティブサプライズに反応することなく102後半で一進一退。
- ・米10年金利は+4.0bpの2.721%。2年金利（+0.43bp）、5年金利（+3.3bp）は小幅上昇となり、10年以下のゾーンでフラットニング一服も、30年（+2.0bp）ではフラットニング継続。5-30年スプレッドは2009年以来の水準に縮小。欧州債市場は前半にラリーしていたが、米金利上昇の余波で結局は横ばい圏内。
- ・CFTCデータ（3/25）によるとJPYネットショートポジションは2週ぶりに拡大。EURは7週ぶりにネットロング方向への傾斜が一服。米10年債のネットショートポジションは前週に大幅縮小した後、小幅拡大。

【国内株式市場・経済指標他】～IIPはネガティブサプライズ～

- ・日経平均株価は前日比+131.80円の14827.83円で取引終了。
- ・2月鉱工業生産指数はネガティブサプライズ。前月比▲2.3%と市場予想（+0.3%）及び生産予測調査（+1.3%）を大幅に下回り、実現率は▲3.7%に落ち込んだ。悪天候が影響した可能性があるが、それだけで全てを説明するには無理がある。駆け込み需要が想定ほど強くなかったことや輸出向け生産の伸び悩みが響いた可能性が高い。生産予測調査では3月の挽回増産（+0.9%、予測修正率+0.4%）と4月の小幅減産（▲0.6%）が示された。直近の実現率から判断すると実際の生産は下振れリスクが大きいとしても、当初予定していたより4月の減産はマイルドなものに抑えられそうだ。増産モメンタムは1月でピークアウトした格好となるが、在庫水準の低さは、生産調整が長引かない可能性を示唆している。
- ・Markit版PMIは53.9と前月（55.5）から低下。生産が全体を下押ししたが、新規受注と新規輸出受注が高水準をキープしたことは心強い。このことを踏まえると4月は外需の持ち直しが支えとなり、大幅減産は避けられる見込み。



【注目点】～短観弱ければ～

- ・今週は明日の日銀短観を皮切りに重要指標が目白押しとなる。日銀短観では増税前の駆け込み需要によって嵩上げされるであろう現状判断DIよりも、先行き判断DIに注目が集まろう。大企業製造業の先行き判断DIが予想（コンセンサス、当社ともに+13）を大幅に下振れるようだと増税後の警戒感から円高・株安の反応がみられるかもしれない。もっとも、その場合は日銀の追加緩和観測が高まる可能性も考えられる。黒田総裁は増税後の日本経済に強気な見方を崩していないが、首相のブレーンからは追加緩和を促すような発言が目立つ。浜田内閣府参与、本田内閣府参与は講演やインタビュー時において日頃から「躊躇なく調整」することの必要性を説いている。日銀短観の悪化をきっかけに、両氏の発言が市場でフォーカスされる展開も予想される。特に本田参与の「5月説」は意識されやすいだろう。